

トスタート選議市

自民党の責任と自信

自由新報

自由民主党機関紙
 発行所
 自由民主党本部
 東京都千代田区
 永田町1-11-23
 郵便番号 100
 電話東京(3561)6211
 振替口座 東京8-19518
 定価一部77円
 1ヵ月 309円
 (消費税を含む)
 (毎週火曜日)
 発行



必ず投票所へお出かけ下さい

上尾市民が注視のなか...
12月1日(日)に投・開票

有権者は史上最高
14万余が直接投票

自由民主党上尾支部は、八月十七日、支部総会を開催し、浅野目義英氏を党公認候補者として、十二月一日に施行される上尾市議会議員一般選挙に出馬させることを、全会一致で決定しました。

なお、同市での自由民主党公認市議会議員候補者は初めてであり、市民からも熱い注目を受けています。

あさのめ
浅野目氏を党公認第一号に決定!!



あさのめ 浅野目氏 (33歳)

浅野目氏は現在三十三歳。小学校教師を経て市議会議員選挙に挑戦した時は、わずか二十五歳。最年少のデビューでした。「強固な意思を持ち敢然とことに当たる青年」、「比類なき情熱と、独特の迫力で、確実にこの上尾市を変えてきた」などの評価を上尾市役所内外で得ており、今回の党公認決定と結びつきました。

浅野目氏は「私が一番正しい。他の人はみんな市民いじめをしています。」といったような他者攻撃のみの選挙戦は好ましいことではない。様々なドラマの裏方として議会はあるという事実を、私は八年間噛みしめてきたし、今回で三回目の最年少候補者になると思うが、ただ一つ上尾の未来のために若い力で奮闘していきたい」と述べています。

あさのめ
浅野目氏の「決意」
 (2面)

浅野目義英
 プロファイル



▼昭和33年5月27日東京都生まれ。父は非鉄金属メーカー研究員、母は小学校教員。幼児期を父の故郷山形県米沢市で送り、7歳の時上尾市に原市団地入居(26年間住む)。上高、法大卒業、小学校教員。
 ▼昭和58年冬、少年期からの夢だった市議選にチャレンジ。地盤と資力の無い中で、若者たちを総動員。「若い力での政治改革」を訴え、次第に支持者を拡大。熱狂的な選挙戦を展開し、史上最年少の25歳で初当選。4年間で45もの一般質問。新時代のための発言と行動を繰り返し、二期目を全力疾走。
 ▼昭和62年冬、多くの支持を受け、29歳でV2達成。厚生委員会副委員長、決算特別委員長など要職歴任、政治手腕を発揮。若々しい発想と果敢な行動で関係者からの高い評価を集めている。
 ▼現在、公共施設整備調査特別委員長、自転車対策審議会長、スポーツ振興審議会委員、上尾自由塾塾長、アムネスティ日本支部会員、上尾青年会議所所長。吉田拓郎と浜田省吾をこよなく愛す。著書「勇気があれば何でもできる」「いちばん元気」

二〇世紀と二一世紀をつなぐ 青年の一人として チャレンジしたかった

昭和三年、私の生まれた年は東京タワー完成、テレビ一〇万台突破の年。原辰徳、山口百恵、鴻上尚史らが同じ年だ。

世界からいい加減にしろと完膚なきまでに叩きのめされ、国土の多くが焼土と化したこの国が、再び自立を求めて立ち上がろうと決意し、高度産業化社会の建設の道をひたすら必死に邁進し始めていたその時代に、成長した世代の一人だ。

少年の頃、街では「走れコータロー」の歌が流れ、テレビでは宇宙に飛び出すロケットがはじめて映し出されていた。自動車が急激に増え、ビルラッシュが始まり、空には工場の煙がたなびいていた。川はもうすでに汚れ、甲虫を見つけたのは至難の業だった。社会に勢いがあり、しかもそれはかなりのスピードを伴っていた。

大人たちは、そこにいかにかうまく乗るかの方法を私たちに話して続けた。彼らは、教えられたことを整然と確実に速くやる必要があるとしきりに教えた。だから、私たちは同じ髪型、同じ服装で登校したし、学校では、廊下を走らず、きちんと右側を歩くことをなるべく守った。宿題も期限があったし、遅れると点がもらえないことはざらだった。意見をはっきり言う者は殆どいなかった。いじめられている友をみて止めると言う者もまずいなかった。

価値がなくて、いかに示されたことをよく聞いて学習の技術を習得するか、いかに集団の中で規律を守るかが、よい子のパロメーターであるかを、突き付けられることの多い時代であった。

立場や主義にこだわっている人には 興味がない。地方議会復権のため 果敢にチャレンジし続けた八年間

八年前、県内唯一の二〇代の市議がこの上尾で誕生した。それは、市民の方々の実験であったように今でも思える。「ああ若輩はやっぱダメだった」とそれだけは言われまいと努力してきたつもりだ。なぜなら、私もしタメという烙印を押されたのなら、もうこの上尾市議会において、若い人が後に続いてくれるのがかなり難しくなってしまう、という強い思いがあったからだ。

低調ではないか、非力ではないか、機能を十分果たしているのか、といった冷やかさが集中している地方議会を、青年らしい発想と青年の実力

で改革できるのかどうかは、私の胸を高鳴らせたし、市民の方々にとてもとても関心のあるところだったに違いない。

議会は、行政側に常に緊張感を与え、独善性や独走を防止するために存在しているというところは、義務教育を終える頃のこともちならん子どもでも知っているはずだ。行政よりもはるかに住民に接近しているという利点を生かし、また英知をフル稼働させながら、行政が考えもつかないような、大胆な街づくりのデザ

インのために、提言や提案を繰り返さなければならぬ責任が議会にはある。その街に入ると何が違う。その街の中に、ときめきとあじわいがあり、しっかりとした意匠が広がっている。どんな人にも話したくなり、自慢したくなる、そんな街をつ

手をこまねきたくない、どんどん前進したい 挑戦する政治が きつと新しい時代をつくる

「どんな人にもドラマがある。たとえ拍手なくても」という新聞の見出しを見たことがある。上尾市は人口約二〇万、たくさんのドラマが、様々な場所で、毎日毎日静かに繰り返されている。そのドラマの一つに、議会はひたむきにどんな役割を果たせるのか。

みんなが幸せで明るい笑顔の時、涙をぬぐわなければならない境遇の人に、議会は一体何ができるのか。もともと木が並んでいたら、もっと川がきらきら流れていたら、もっと花が咲きみだれていたら、どんなに子どもたちの心が豊かになるだろうか

市民と地域の連帯を生み出すために、「市民に愛されてきた歴史的な通り・坂の愛称をポールを立てて保全すること」「公共下水道、汚水、消防などのマンホールのふたをユニークなデザインで飾ること」などを実現させた。前者は、上尾市の市制施行三〇年記念事業として行われたが、

味わいのある街とは、音楽のように語りかけてくる街であると思っている。歴史と文化が人に語りかけてくれればと思いを努力をした結果だ。誰もが平等に暮らせる社会の実現のために、「在日外国人の指紋捺印制度の廃止に向け拒否者が出てもこれを告発しない」市長見解を確約させた。また「市役所自らが率先して聴覚障害者を採用し障害者雇用の風穴あける」ことを実現させた。両者とも各方面で話題となり報道機関の紙面を大きく飾ったが、新選法で育った私と他の議員との意識の明確な差異の結果であり、私でなければできなかったことかもしれないという自負もある。

地球環境を守る責任ある上尾市の行動のために、「ごみの減量化と再資源化の施策の強力な展開」を事業ごとに要求してきた。「子どもたちにごみ問題の緊急性を指導する副読本を製作する」ことも実現にもち

V3に挑戦する私の決意 浅野日義英

こんなことだから、市民とくに若い人は、政治の世界は小賢しくダーティーだと決めつけ、見向きもしないのだと思えてならない。私の挑戦の意思は固くなるばかりだった。議員は、私が高校生頃から情熱を傾けた仕事であったことは、まずもちろんだが、地方政治に対する既成の常識や感覚に、一杯の若い力で、新時代のため早急に風穴を空けなければならぬ。といった信念でも大いに燃えていた。大人たちにとっては、くちばしも黄色いくせに何がわかるか、といった冷笑に値するものだったかもしれないが、八年前の冬、若い私の一つの決然たる行動がスタートした。

う悲劇的な現実がある。こういった議員に私は信頼や興味を全く持ち得ない。市民が必要としていることを、代弁するのが仕事であるのに、地方議会のチェック機能を無にするにせよ、セレモニー主義の世界、党利党略・派利派略競争の世界に没頭してしまうことは、その機能を本当に理解しきれていない。極めて不健全と言わざるを得ない。

八年間、既成のものにとらわれないうる気と、改革意識に燃える気概だけは、失われないように努力をしてきた。教員時代には、こともたちに「何度でも練習しなさい」と言い続けてきた。正しいと思える答えを出せるまで、丁寧に丁寧に問題をとり上げ、この世界で私自身も八年前正

